

「授業」で生徒を、学級を伸ばす 第4回

# 中学生にする

# 導入期指導の工夫

中学生にふさわしい学習習慣や生活習慣を身に付けるために、導入期の指導は重要だ。

しかし、先生方からは「なかなか効果的な指導が出来ていない」という声も聞かれる。今号では、中学校の導入期指導の課題や重要性を改めて見直すと共に、具体的な実践の工夫を紹介する。

## 導入期指導の具体的な実践とその工夫

### 学校事例①

山形県東根市立神町中学校 ▶ P.10~16

学習シラバスや自学ノートの活用を通して  
学習習慣の定着を図る

### 学校事例②

静岡県沼津市立原中学校 ▶ P.17~23

ファミリー学級とグループエンカウンターにより  
人間関係づくりを促す

## 導入期指導の課題とポイント

対談 ▶ P.4~9

導入期指導の課題と  
重要性を整理。  
課題解決のために必要な視点として  
学級づくりと  
学習習慣の定着を提案

# 学級づくりと学習習慣の定着で 中学校生活を軌道に乗せる

中学校入学直後は、小学校時代とは異なる新たな人間関係や学習内容、生活リズムなどに戸惑う場面は少なくない。戸惑いを解消し、有意義な3年間を送るための土台をつくるにはどのようにすればよいのか。

入学直後から夏までの導入期指導の工夫について、  
中学校校長経験のある聖徳大の壺内明教授と千代田区立神田一橋中学校の岡田行雄校長が意見を交わした。

## 導入期の課題

### 生徒の不安と緊張をいかに取り除くか

#### 最も気を付けるべき時期は 5月の連休明け

— 小学校から中学校に進学してきた生徒は、どのような課題に直面するのでしょうか。

**壺内** 新入生は、「中学校に入ったから勉強を頑張ろう」「部活動では何をしよう」と希望に満ちつつも、知らない友だちや先生に囲まれて緊張感のある日々を過ごします。未知の中学校生活に対する期待や不安が入り混じる中で、多くの生徒に共通する課題は7つほど

にまとめられます(図1)。学校は、生徒の思いや願いを大切にしつつ、中学校生活に早くなじめるよう、これらの課題に取り組みむことが大切だと思います。

**岡田** 現任校では約20〜30の小学校から子どもが集まります。ほとんど知り合いのいない中で新しい人間関係を築かなければなりませんから、生徒の不安は大きいことでしょう。学習面でも、学習内容が難しくなり、教科担任制になることで、生徒は不安を抱えています。それをいかに解消するかが、1年生の担

図1 導入期の課題

- 1 複数の小学校から集まってくる生徒たちが、良い人間関係を築けるか
- 2 学級担任制から教科担任制に変わり、教科ごとに変わる教師との人間関係を築けるか
- 3 学習に遅れが出ないように、自ら進んで学習が出来るか
- 4 教師がいなくても、委員会活動や係活動に責任を持って取り組めるか
- 5 校則を守り、中学校生活にスムーズに移行できるか
- 6 部活動で上級生との人間関係を築けるか
- 7 規則正しい生活習慣を確立できるか

「授業」で生徒を、学級を伸ばす

第4回

「中学生にする」導入期指導の工夫

聖徳大児童学部  
壺内明 教授

つばうち・あきら ◎教職歴38年。東京都公立中学校教諭、足立区教育委員会指導主事・指導室長、江東区立深川第三中学校校長、港区立御成門中学校校長、全日本中学校長会会長、中教審臨時委員などを経て、現職。



東京都千代田区立神田一橋中学校  
岡田行雄 校長

おかだ・ゆきお ◎教職歴34年。専門教科は理科。東京都公立中学校教諭、世田谷区教育委員会指導主事、東京都教育庁指導部中学校教育指導課指導主事、足立区教育委員会教育指導室長などを経て、現職。



千代田区立神田一橋中学校 ◎「向学、礼節、貢献」を学校目標に掲げる。礼節を重視した教育活動を推進し、「人間力」の育成を図る。生徒数は318人。

任の大きな役割です。

壺内 発達段階を考えると、1年生は自我に目覚め、独立の欲求が高まる時期です。更に、自己内省をするようになります。自分が気にしていることを他人から指摘されると、動揺し、自信を失い、自己嫌悪に陥ります。また、小学校のクラブ活動と違い、競技性の高くなる部活動では先輩・後輩という新たな人間関係に直面します。学習面の小中の違いもさることながら、人間関係の不安やプレッシャーが、登校しぶりや不登校、更には暴力行為となつて表れることが考えられます。

岡田 どの学校も、新入生の不安を払拭するために、学習や部活動について説明するガイダンスなどを行っています。4月は緊張感もあり特に問題はないのですが、最も気を付けるべきなのは5月の連休明けです。4月の疲れが一気に出て、内心、学校に行きたくないと思つていた生徒が次第に登校しなくなる場合があります。私の学校では、連休明けに休んだ生徒については必ず家庭訪問をするなど、早めに手を打つようになっています。

壺内 データで見ても、不登校数は中学1年生で増えています(図2)。こうした生徒の状況を認識し、教師が一丸となつて生徒と向き合う必要があるでしょう。

岡田 導入期の課題と共に、私が気になっているのは、2学期になると学校への不安が大きくなつていくことです。東京都が実施し

図2 学年別不登校児童生徒数

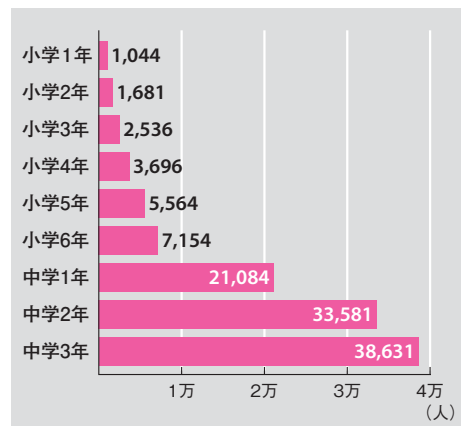
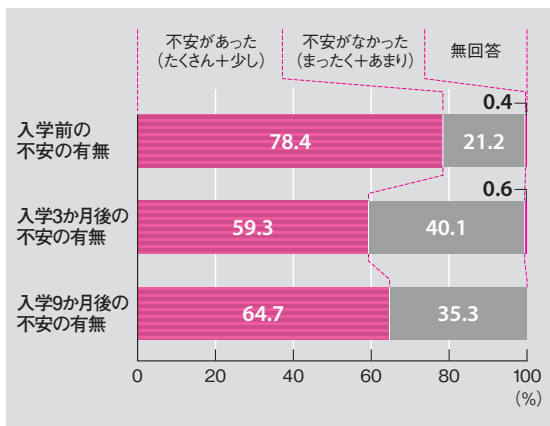


図3 中学校第1学年の生徒の適応状況



出典/東京都教育委員会「平成22年度 小1問題・中1ギャップの実態調査」  
調査対象は都内の公立中学校の第1学年生徒 7月調査: 7,593人、1月調査: 7,392人

出典/文部科学省「平成22年度 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」  
\*今回公表する平成22年度調査結果には、東日本大震災の影響により実施が困難であった岩手県、宮城県、福島県は含んでいない

た「平成22年度 小1問題・中1ギャップの実態調査」によると、入学前に不安がある生徒は78・4%であり、入学3か月後には59・3%に減少します(図3)。これは中学校生活に慣れてきたからだと思いますが、9か月

後の2学期になると64・7%に増加するので、互いを理解するようになったからこそ新たな問題が生じ、学校生活に不安を感じるのでしょうか。

「中1ギャップ」を考えた時、「学校種の壁」

と、生徒一人ひとりの持つ「人間としての壁」の2つがあり、それらを乗り越えられる子どもと乗り越えられない子どもがいます。担任として、学級全体への対応だけでなく、個々の生徒も支援していくことが重要なのです。

### 導入期指導のポイント①学級づくり

## 生徒それぞれの居場所がある学級に

### 3年間を有意義に過ごせるかは1年生の学級づくりが鍵

——導入期の課題を解消するために必要なことはどのようなことでしょうか。

**壺内** 先ほど挙げた7つの課題の中で、最も大切なのは、生徒同士の良い関係をつくること、生徒一人ひとりが「自分の居場所がある」と感じられるようになることです。そのためには、1日の大半を過ごす学級がそのような場になる「学級づくり」が重要になります(図4)。中学校にいたことが楽しい、安心できる場所があると思えば、学習や部活動などにも一生懸命になれるでしょう。生徒が中学校3年間を楽しく、有意義に過ごせるかどうか。更には、将来の夢や希望に向かって進めるかどうかは、1年生の学級づくりにかかっているといっても過言ではないと思います。

**岡田** 私は担任時代、「失敗が許される学級」

づくりを目指していました。例えば、生徒が任されていた係の役目を忘れた時、他の生徒から厳しく指摘されることがありました。この時、忘れたことを単に責めていては、生徒は学級に居づらくなります。責任を感じてもらうことは重要ですが、同時に「次から頑張ればよい」という雰囲気や学級につくることに必要です。そうすることで、生徒は萎縮せず、前向きに次のことへ取り組めるのです。

こうした学級の雰囲気づくりは、担任の生徒への接し方にかかっています。例えば、「理科係はみんなへの連絡が遅れて迷惑をかけたけれど、実は理科の授業が終わってみんなが帰った後、残って片付けをしていたんだよ」と学級全体にひと声掛けるかどうかで、その生徒を見る目は変わるのです。「お互いさま」を意識させながら、「みんなのためにやってくれた」という自己肯定感を味わわせられるとよいでしょう。

図4 学級づくりのポイント

- 一人ひとりに居場所がある
- 学級で役割があり、互いが認め合える
- 学級集団としてのルールや規範があり、守られている
- 心を開き、自由に自分の思いや願いが表現できる集団である
- 将来の夢や希望が語り合える雰囲気がある
- 教室環境が整備されている

図5 学年単位で必要な取り組み

- 教科間の指導方針をそろえる
- 各教科の特性を生かしながら、生徒を多面的に見取る
- 学年主任を中心に学年団として生徒に向き合う

### 委員会や学校行事を通じて生徒一人ひとりを見取る

**壺内** 生徒同士が支援できるような学級づくりには、リーダーの存在も重要です。担任が1日中、学級に入っているわけにもいきませんが、生徒の人間関係には担任の力だけでは解決できないことがたくさんあるからです。

**岡田** リーダーの育成は居場所づくりとも関係があります。学級委員はAさん、体育祭はBさん、合唱大会はCさんと、委員会や学校行事などでそれぞれ活躍できる場をつくり、学級全員が意欲的にクラスにかかわり合えるようにしたいものです。



「中学生にする」導入期指導の工夫



**壺内** 確かに、生徒が互いに違いを認め合えるようになれば、誰にも居場所のある学級が出来ていきます。例えば、委員会や学級の係を決める際、生徒の意見を聞いて、一人ひとりに適した役割を任せられれば、生徒は自信を持ってやり遂げられるでしょう。その過程で、教師やクラスメートから認められ、励まされることで生徒は自信が付き、役割認識が芽生えていくのだと思います。

**岡田** ただし、入学当初は担任であっても生徒の理解は不十分です。小学校から生徒の情報は提供されているものの、最初は役割を機械的に決めざるを得ないこともあります。4月、5月と互いが分かかっていくにつれ、生徒からの推薦など、更に人間関係を深められる手法を取り入れられると思います。そのためには、普段の授業や学校行事を通して、私たち教師が出来る限り早く、生徒一人ひとりを見取っていく必要があるでしょう。

生徒の物差しで心のサインを察する

——生徒を見取るためにはどのような工夫がありますか。

**岡田** 私は、生徒の輪に入っていくのが一番だと思います。多くの学校でそうだと思いますが、1年生の担任は休み時間でもほとんど職員室にいません。生徒と話し、一緒に行動し、触れ合いながら理解しようとしています。

**壺内** 教師が生徒に心を開く必要もあるでしょう。自分を知ってもらうために、授業や休み時間、学校だよりを活用し、自分が何を考え、何を思っているのか、もっと情報発信をすべきです。私自身、生徒と共に生きる教師でありたい、小さなサインに気付いて子どもの心を察せられる教師でありたいと、生徒の心に近づくよう心掛けていました。

**岡田** 同感です。生徒の心のサインを教師が

見逃さないことが大切です。授業を真面目に受けていた生徒が、ある日、ポケットに手をつ込んで授業を受けていたとしたら、それは心が変化しているサインです。家で叱られて学校に来ている時、友だちとの関係がうまくいっていない時などは、生徒はいつもと異なる表情を見せるものです。そうしたサインは生徒によって異なります。教師は自分の物差しではなく、生徒の物差しでそれぞれのサインを察知できるようにしたいものです。

学年でのルールを統一し指導の足並みをそろえる

——学級づくりに関して、学年単位ではどのような取り組みが必要でしょうか。

**岡田** 中学校は学年単位で動きますから、1年生の導入期には学年主任が主導し、3年間を見通した基本的なルールを学年内で統一していくことが大切だと思います(図5)。細かいことですが、掃除後、机に載せた椅子を下ろして帰るのか、そのままにしておくのか。あるいは、給食は班で取るのか、前を向いて取るのかといった、生活習慣のようなことでも統一しておく方がよいでしょう。担任によって方法がばらばらでは、生徒が混乱するからです。生徒は「あの担任の方法がよい」「何でこんなやり方をするんだ」と言い出して、トラブルの原因にもなりかねません。

**壺内** 自校の生徒として身に付けなければな

らないことを学年団で共有し、3年間を見通して、1年生での指導の目標を決めることは必要です。教科担任制で複数の教師が指導に当たるからこそ、指導にばらつきが出ないように、足並みをそろえておくことは重要です。

**岡田** それが教科担任制のデメリットであり、メリットでもあります。教室に次から次へと別の教師が入り、生徒はいろいろな先生と話が出来ます。たとえ担任とうまくいかなくても、他の先生とは話しやすいということもあります。複数の教師の目で生徒を見て、学年団というチームで生徒を指導できるからこそ、さまざまな生徒に対応できるのです。

**壺内** 教科間での連携は、生徒を見取る上でも重要になります。

**岡田** 私の専門は理科ですが、授業での経験からいうと、実験や体育、音楽などの活動的な場面では、生徒の本質が表れやすいと思います。実技教科も含めて、教師が授業中に察した生徒の情報を教師間で共有することは、生徒理解を深める上で重要だと思います。先生方は多忙だと思いますが、休み時間などに気になったことはきちんと担任に伝えるなど、意識的に行いたいものです。

## 生徒のために 学年団としてのまとめを

——学年団のまとめはどのようなようにしてつくるのでしょうか。

**壺内** 若手教師やベテラン教師、教科指導に長けている教師、生徒とコミュニケーションを取るのが上手な教師など、年齢層や得意分野が多様な教師で学年団は構成されています。個性豊かな教師がチームの一員として、生徒のために動くことが重要なのです。同じ学年の担任が休んだ時に、副担任や他の担任が入っても、その学級が運営できるようにしておきたいところです。

## 導入期指導のポイント② 学習習慣の定着

# スマールステップで入学直後の意欲を維持

## 少しでも努力すれば、 今より力が付くと実感させる

——学級づくりの他に、導入期の指導で大切なことはどのようなことでしょうか。

**岡田** 「学習習慣の定着」だと思います。入学当初、生徒は教師から指示されると、素直に学習計画を立てて学習してきます。ところが、中学校の学習が難しくなるにつれ、言われた通りに作った学習計画と、自分の学力のギャップが次第に広がっていき現実と直面するようになります。教師に「頑張れば出来る」と言われても、現実には計画通りに出来ない自分があるわけです。

しかし、出来ないからといって諦めてし

**岡田** 学校も1つの組織ですから、学年団にまとまってもらうことは大前提です。たとえば生徒たちに落ち着きがなかったとしても、学年の先生方が団結していればなんとか乗り越えられるものです。

**壺内** その中でキーマンとなるのはやはり学年主任でしょう。リーダーシップや人間的な信頼性などいろいろな能力を求められますが、やりがいのある役割だと思います。

まっでは、学習から離れてしまう一方です。入学時には程度に差はあれ、新鮮な気持ちから学習意欲が高まっているものです。その意欲を維持できるような声掛けや課題の出し方の工夫が必要だと考えます。たとえ思い通りに学力が伸びなくても、少しずつでも努力を積み重ねただけの成果や達成感を得られるような課題を与えて、努力を続ける意欲を持たせてあげたいと思います。

**壺内** 同感です。学習を続け、習慣化するためには、どんなに小さくても達成感が必要だと思います。私の担当教科は数学ですが、教師時代の授業の終わりに必ず小テストを実施していました。5分間で2問ほどに取り組むもので、例題レベルの易しい問題です。ほとんどの生

## 「中学生にする」導入期指導の工夫

徒が満点となるようなテストでも、生徒は正解すればうれしいものです。授業ごとにこの小さなステップを積み重ねることによって、学習意欲を維持させ、家庭での学習が習慣になるようにしていました。

### 校長の役割

## 生徒・保護者と学校の信頼関係を支える

### 校長の声掛けが 生徒の自信につながる

——校長として、導入期の指導で心掛けるべきことは何でしょうか。

**壺内** 私は校長時代、出来るだけ生徒に声を掛けるようにしていました。生徒にとって校長と話をするのは、それなりに大きな出来事ですから、家で必ず保護者に「校長先生にこんなことを褒められた」と報告するでしょう。保護者はそれを聞き、我が子を褒めると思いますが、これが自己肯定感となり、生徒のやる気や自信につながります。また、保護者にとって生徒の声は何よりの学校情報です。「生徒をしっかり見てくれていて」と学校に安心感を抱くことにもつながるでしょう。

**岡田** 4月は校長も忙しい時期ですが、私も出来る限り自分の目で教室を見て回るようにしています。私が校長になって感じるのは、

**岡田** ただし、入学直後は、頑張り過ぎる生徒もいるので注意が必要です。スタートダッシュは重要ですが、長い目でみて生徒を励まし、一人ひとりの生徒に合わせて具体的なアドバイスをしていきたいものです。

担任が生徒の良い面、悪い面も全て見た上で指導するのに比べ、校長は普段、生徒とかかわる機会が限られている分、生徒の良い面を見て指導する機会が多いということです。もちろん悪い面を見れば指導をしますが、校長になってからは、生徒の良さを見付け、先生方に伝えたり、全校生徒の前で褒めたりすることが、自分の役割だと思ってきました。特に、全校生徒の前で褒めることは、生徒だけでなく、その担任にとってもうれしいものです。おのずと校長と担任の先生との距離も縮まります。

**壺内** 導入期から積極的に声を掛け、校長の立場から、生徒の意欲の向上や保護者と学校の信頼関係の構築を支えることは重要だと思います。私は校長時代、自分の立場や影響を考え、生徒の良い面を忘れないように常にメモを取り、担任に伝えるようにしていました。**岡田** 常に前向きな気持ちになれるように、

遅刻の多い生徒には「学校に来るのが少し早くなったね」と言い方を工夫します。校内のことに最終的に責任を取るのは校長です。校長の立場なりに、生徒や保護者、更には教師との信頼関係をきちんと築いておくことは必要だと思います。

**壺内** 生徒の入学当初の不安が、学校への不信に変わることのないよう、まずは学級、学年、ゆくゆくは学校全体で生徒を見取り、接していく体制を校長からつくっていくことが大切です。校長が代われば学校が変わると言われるように、学校を前より少しでも良くするのが校長の役目ではないでしょうか。

——本日はいろいろな示唆をありがとうございました。

### 導入期指導で心掛けるポイント

- 普段の授業、委員会活動や学校行事などを通して学級づくりを行うと同時に、生徒一人ひとりへの理解を深める
- 生徒が「出来ない自分」に直面しても勉強を諦めないように、努力すれば達成感を得られる具体的なスモールステップを準備して学習習慣を育む
- 生徒の入学当初の不安を学校への不信にしないために、学級や学年はもとより、学校全体で生徒を見取る体制をつくり、生徒・保護者と学校の信頼関係を築いておく